

大成功の竹灯籠！

本年の大鹿夏祭り中止を受けて、公民館では「少しでも夏祭りの雰囲気」と企画し、公民館クラブによる演舞の様子を、ケーブルテレビで放送することになりました。(ただ演舞を披露するのでは雰囲気が出ませんので、竹灯籠で雰囲気を演出することに)

7月22日(祝)に、24名の方にご参加・ご協力いただきました。50点ほど作品が出来上がり、いざ明かりを灯すと、とても幻想的で、本当のお祭りのような雰囲気の中、クラブの皆さんに出演いただきました。来年の夏祭りにも繋げていき、今後は「名物」になることを期待します。



ろくべん館だより

こんにちは。ろくべん館の管理人の森上です。8月に入り気温が高く日差しも強い日が続いて、熱中症がとても心配になりますね。水分補給をしながら塩分をとり熱中症予防を心がけてください。

さて、今回はろくべん館の入り口に飾られている宗良親王の歌についてお話したいと思います。大鹿村では古くからゆかりの人物として知られており、非常に優れた歌の作者として有名な皇子であったと伝えられています。親王が編纂した歌集は「李花集」、「宗良親王千首」があり、撰集には有名な「新葉和歌集」もあります。

南北朝時代は混とんとした戦の絶えない時代だったのですがそんな中で後世に残る歌を数多く残せたことは素晴らしいことだと思います。ろくべん館に展示されている歌は『君のため 世のため何かおしからん 捨ててかいある 命なりせば』

(漢字を当てはめました) という歌です。

この歌は、親王が小手指原の戦いの折に全軍将士の士気を鼓舞した有名な歌であり、あの太平洋戦争のときにこの歌が戦地へ送る兵士の士気を高めるためにうたわれていたとお聞きしました。悲しい出来事だったと思います。現在、上蔵の信濃宮神社の境内にこの歌も他の歌2首とともに歌碑として遠い昔のたたずまい

を見せています。

宗良親王にまつわるお話は多々あり、後醍醐天皇の何番目の皇子だったのか、また読み方にも諸説ありいまだに論議をされています。

また、親王の子どもや奥さんについても伝説が残っています。いずれにしても宗良親王は大鹿村にとってとても大事なかけがえのない存在であったのではないかと考えられます。以前は釜沢の中村寿人先生が研究されていましたが、そのあと研究される方が出てきませんでした。まだ謎の多い宗良親王について研究される方が出てこられることを願っています。

さて、ろくべん館は8月1日から大規模改修のために休館となっています。現在は、展示物の確認、移動の準備、新しい展示の検討などを行っています。よりよろろくべん館になりますよう村民の皆さんも関心を持っていただいてご意見をお聞かせいただければと思います。



宗良親王の歌